

## 企画書

提出者 ウォク ジェイク

|タイトル| しょうがなくない、支え合い社会の道へ

### 概要

私は長く考え続けてこの企画が絆をテーマとするよりも、絆を解決にします。アメリカ人として日本で10年間の間にブドウときのご栽培から教育まで幅広い経験を蓄えた私は、修士で習得した人類学を合わせて、絆が生み出せる可能性を社会の問題に対して「しょうがない」と癖ほど言う人たちに語りつくしたいです。日本語は私の母国語ではなくても、日本は私の住まいですので、この不思議な言語を利用しながら、自分の不思議な考え方を共有していきたいです。絆は家族だけじゃなく、近所の人たち、友達、自分と同じ集落や町に住んでいる人たち、絆は本当に限界がないです。日本の可能性を守り、そして持続可能な日本に向けて、田舎から都会まで絆を広げておかないといけないと思います。里山の管理から渋谷のゴミまで、共存の定義を上回るほどお互いに美しい社会を作ることによって日本の社会問題を乗り越えます。

### |想定する読者ターゲット|

1. 将来を心配する若者たち
2. 仕事とお金を中心に回されている社会に対して不満を感じている人々
3. 持続可能な社会に気を配っている教育者、公務員、一般人
4. 歴史から学べて、将来を創造したい日本人
5. 日本が外からどう見えているか、海外からの考え方に興味がある人

### |構成案|

紹介

- 自ら自分が歩んだ道を紹介しながら、私が望んでいるお互い様の「しょうがある」社会の概念を説明する。

第1章：人類の危機

- 地球温暖化と生態系崩壊
- 日本が取り組んでいる社会問題
- なぜこうなりましたか？

第2章：「No man is an island」だれも孤島のごとくではありません

- 森の入相、里山の管理

- 松茸から学べること
- 共存できる生態系と農業の次の改革

### 第3章：想像の実現への長い道なり

- 過疎地域と高齢化社会
- 時給が低く、労働時間の長い日本
- 作物の規格外をはじめ、日本の農業の苦しさ

### 第4章：お金単位から「人」を単位にする社会へ

- 人が原子化される社会
- 人の働きがお金の代わりに回せる
- コミュニティーのため、活動する

### 第5章：子育てには村が必要

- 両親が二人きりで子供の世話をすべて背負うのはつらい
- それぞれの民族の子育ての仕方
- 子育ての負担を分けて、子供の周りに深い絆を作る

### 第6章：絆を元にした社会

- 理想な世界の理想な一日、田舎版
- 理想な世界の理想な一日、都会版
- 自分ができること、身近にできること

## | サンプル原稿 |

### オープニング

アメリカのルイジアナ州は夏の日が熱いです。東京のように午前11時前38度か39度まで上がる日々が多いうえに、湿度は南九州ぐらいです。私はこの日本であまり知られていない田舎の州で育って、身の周りには丘さえなかった沼と川ばかりの地形を見ながら大人になりました。絆の話は人間だれであろうとも最初の絆が家族です。

私はある夏の日、父側のおじいちゃんと魚釣りをしていました。ピーローというカヌーに似ている小さい船に二人で乗って、バイユーという湖でもない川でもない独特な水域の奥で魚釣りをしたのです。ピーローの真ん中に氷の代わりにバイユーの水がたっぷり貯めこんだクーラーが置いてありました。とても暑い日で、糸杉の日陰でしか耐えられないぐらいでした。船が動かないように、船を糸杉の下の方の枝に縄で結んでおきました。

日本にはない絶景です。糸杉の仙人の髭のような長い灰色なコケが枝から垂れて、ときおり風にふわっと揺れました。ルイジアナではバイユーに行っても、そのたまたま吹く風が全然気持ちよくないです。風と言っても、ただの熱い、じめじめした空気に過ぎません。今も目を閉じて想像すれば、その風を顔に感じるすることができます。泥くさい、豊富な自然な香りと微妙に混じっている日焼け止めの匂いもすぐ思い出すことができます。私はよくこんな風におじいさんと一緒に魚釣りをし

に行きました。

でも、その日は初めて、氷を入れずに、バイユーの水をクーラーに入れました。7歳か8歳の僕は意味わからなかったけど、おじいさんは船に乗ると余計な話が嫌いなので、僕は聞きませんでした。相変わらず、魚釣りで勝負をしました。一番魚を釣った人は「世界一」になるという設定でいつも二人で勝負していました。意外と負けず嫌いのおじいさんはあの日全然ついてませんでした。私が釣った7匹に対しておじいさんはたった3匹しかつれなかったのです。

いつもの魚釣りなら、家に帰って魚の骨と内臓を取ってからすぐ魚フライを作りますが、その日は違いました。おじいさんの家から600~700メートル離れている3アールもないとても小さい「ベルズ・ポウンド」という池の手前にトラックを止めました。どこかに行って、船に乗って魚釣りをする特別な日以外、この小さな池に行って、気軽に魚釣りをしました。おじいさんはその小さな池に、その日釣った、僕が自慢に思い、そして食べることを楽しみにしていた魚たちを全部池に逃しました。

僕は「なんで、なんで」とぐずぐずしましたが、おじいさんは言葉ではなく、目だけで「わがままはやめて」と伝えました。そしておじいさんは小学生がわかるように説明しました。ベルズ・ポウンドは川や沢に流れてはいません。日本でいうと、田んぼの隣にある、ため池のようなものです。「僕らを含めて、近所の周りの子供たちはよくあの便利な道路の隣にある池で魚釣りを楽しんでいるよね」とおじいちゃんが述べました。僕はまだ理解できなかったから、おじいちゃんはちょっとイラっとしながら、さらに説明しました。

「僕らがいつもここで魚を釣ったら、もうこの小さな池の魚は全部いなくなる。ほかのバイユーや川から魚が入ってくるわけでもないし、一回いなくなったらずーっといなくなるんだよ。その時、僕らだけじゃなく、だれもここで魚釣りを楽しめなくなる。わかる？俺は定期的にこの池に魚を逃しているから釣りができるんだ。こんなちっぽけな池に永遠に魚が泥から出ると思ったの？とても賢い子なのに、よく自分の周りを何も考えないよね。」

その後、僕は自ら「ベルズ・ポウンドに魚を逃すために釣りしに行こうよ」とおじいちゃんに言いました。おじいちゃんをよく「そんな大量の魚が生きられないよ、あのちっぽけな池には」と言い返してきました。大人になってから、僕は最近に、何の理由もなくこの子供の時にあった話を思い出しました。2020年に急に亡くなったおじいちゃんの思い出も湧き出すので、グレープフルーツのように甘くて苦いです。

でも、大人になったら、おじいちゃんの考えていることがようやく理解した気がします。あの池は私有地だけど、主に子供が外での遊びを楽しむために誰でも使うようにしてくれていました。それはつまり近所の子供たちの笑顔と成長のために、地主さんがその利用を許可していました。僕のおじいちゃんはその意思を受け取って、釣りができるほど魚がいるようにしました。僕が望んでいる絆はこういう絆です。お互いにより楽しい、より暮らしやすい環境を作る絆、回りの人々、子供から老人まで考える絆です。

周りがどうでもいい、自分のことばかり考えたら、こういう素敵なことができません。僕のように、釣りを楽しんだうえに近所の子供たちと一緒に釣りをして、友達になることもできないです。絆はぬくもりがある、便利な、楽しい社会を作る鍵です。絆は編み物のように人々をつなげていま

す。でも、消極的なものではありません。常に人によって、そして人々の間に作られているものです。現在の社会は資本主義に従い、お金という抽象しか人が動けなくなっています。環境、時間、人間関係まで自然の文脈から引き出されて、資本化にされ、個人でお金を貯めることが目的となっている社会です。現代の日本の若者はますますそう感じている：一人ひとりの孤独な社会です。東京の20歳の人を想像してごらん。毎日電車を乗って、ヘッドホンをつけてTikTokをスマホで見ます。仕事は何かのサービス業で、給料があまりもらえないです。一日の仕事が終わったら、一人でカラオケに行って、一人でお酒を飲んだり歌ったりします。それでも全然不満を感じていません。私はかわいそうとも言えません。ただ劇普通の話です。この想像した人は社会から何も期待していない、そして何も社会に貢献しようとしなない、そういう人たちは多くなっている一方です。なんでこうなったか、どうやって変わるか、この二つの質問に簡単な「絶対」の答えがないです。なくてもいいです。質問を聞くことに価値があります。よりいい世界を想像してみることがよりいい世界を創造するために前提です。私はこの本で幅広い話題を結んで、これから「どう生きるか」を読者の皆様が自分なりに答えられるようになると期待しています。

｜以上となります。よろしく願いいたします｜